

# 知的障害者の余暇に関わる学校の役割

—知的障害者とその家族へのインタビュー調査から—

安田 智恵 ・ 丸山 啓史

(京都市立東総合支援学校・京都教育大学)

What We Can Do at School for Leisure Activities after Graduation

—An interview survey of people with intellectual disabilities and their families—

Chie YASUDA, Keishi MARUYAMA

**抄録**：本研究では、知的障害者とその家族へのインタビュー調査から、知的障害者の余暇をめぐる実情を明らかにし、余暇の在り方に関わる要因を整理することによって、学校にできる指導・支援の手がかりを探った。調査の結果、余暇に関わって家族が担っている部分は大きく、家族によって余暇が広がることも少なくないことがわかった。現状においては、多岐にわたる内容が家族の役割となっている。学校卒業後に新たな余暇活動の場を探す難しさも再確認された。学校における取り組みなどが現在の余暇につながったケースはあるものの、余暇に関する学校からの意識的な働きかけはあまりなかった。学校には、卒業後の余暇に向けた準備や、家族への情報提供などが求められる。

**キーワード**：知的障害者、学校卒業後、余暇、インタビュー調査

**Key Words**：people with intellectual disabilities, after graduation, leisure activities, interview survey

## I. 問題と目的

余暇について、デューマズディエ（1972）は、「個人が職場や家庭、社会から課せられた義務から解放されたときに、休息のため、気晴らしのため、あるいは利得とは無関係な知識や能力の養成、自発的な社会参加、自由な創造力の発揮のために、まったく随意に行なう活動の総体である」と述べている。

また、郷間ら（2007）は、「余暇活動は、QOL（quality of life：生活の質）の構成要素として中核指標の一つであり、人々の生活をリフレッシュさせたり、活力を与えたりする重要なものである」と述べている。就労先以外にも安心できる人間関係を形成することで就労の維持を図ることができるとして、余暇活動における人間関係の大切さを述べた研究もある（佐々木・野口・村上、2016）。障害者基本法第25条は、障害者が円滑に文化芸術活動、スポーツ又はレクリエーションを行うことができるよう、活動の助成その他必要な施策を講じることを国及び地方公共団体の義務として定めている。

特別支援学校学習指導要領（平成29年3月告示）においても、中学部「職業・家庭」家庭分野に「ウ 家庭生活における余暇」の項目がある。解説において、「余暇」は、生活を豊かにすると共に、学校生活や将来の職業生活を健やかに過ごす上でも重要な活動である」とあり、職業生活や健康との関連に言及しつつ余暇の重要性を指摘している。友達と共に楽しむこと、地域の公共施設等の利用、地域行事への参加などを通して他者との関わりや活動の幅が広がるような指導をすることの大切さも述べられている。

しかし、知的障害者の場合、特に学校卒業後において余暇を充実させにくい状況がある。休日にはテレビを観たりゲーム・パソコンをしたり、家族と一緒に過ごしたりすることが多い現状があるとされる（栗林・野崎・和田、2018）。家族への調査では、「(活動の)送迎は母。いつまで続けられるか心配」「とにかく休日に行く場所を提供してほしい」との声もある（鈴木・細谷、2017）。学校卒業後、学齢期に通っていた余暇活動の場に継続して通える

ことは少ない。新たな場を見つけることの難しさや家族の負担についても言われてきている。

一方で、次のような調査結果もある。「学校時代の友人や職場の仲間、ボランティアと過ごし、親の会やサークル活動に参加して前向きに活動する者もいた」（武蔵・水内，2009）、「休日の余暇活動について楽しいかどうかの質問に対しては46人（92%）が「楽しい」と回答した」（郷間・藤川・所，2007）というものである。

学校卒業後の余暇の在り方には、どのような要因が関わっているのだろうか。先行研究においては、余暇の実態や家族のニーズを明らかにしたもの、余暇に対する本人の意識を調査したものなどが見られるが、現在行なっている余暇活動を始めたきっかけ、現在に至るまでの経緯、家族など周囲の関わり等について詳しく調査した研究は少ない。特に、インタビュー調査によって余暇をめぐる実情を聞き取ったものはほとんどみられない。また、余暇に関する学校教育段階からの指導も求められるようになってきているものの、実際にどのようなことが必要とされているのかといった調査や、具体的な指導・支援の検討は、十分とは言えない。

そこで本研究では、知的障害者とその家族へのインタビュー調査から余暇をめぐる実情を明らかにし、余暇の在り方に関わる要因を整理することによって、学校にできる指導・支援の手がかりとする。

## Ⅱ. 方法

### 1. 対象者

調査の対象者は、知的障害者本人13名とその家族15名（14名が母親、1名が姉）である。

インタビューの形態としては、本人単独でのインタビューが6名、母親単独が7名、本人とその家族に同時に行なったものが7組であった。各ケースの本人（母親単独でのインタビューの場合はその子ども）の年齢層とその内訳は、10代1名、20代10名、30代3名、40代3名、60代1名である。性別については、男性12名、女性6名である。1名を除いて、17名は家族（祖父母、親、きょうだいなど）と同居していた。インタビュー対象者と、本人（子）の基本情報を表に示す。なお、性別やインタビュー時の年齢は本人（子）のものである。

表 インタビュー調査の対象者

対象者	性別	年齢	通った学校、現在の日中活動について
Aさん	女性	47歳	養護学校卒業。養護学校に通ったのは高等部のみ。作業所で働く。
Bさん	男性	41歳	特別支援学校を卒業後、高等技術専門学校に1年通った。現在は転職活動中。
Cさん、Cさんの母親	男性	20歳	特別支援学校卒業。中学部から特別支援学校。就労移行支援事業所に通う。
Dさんの母親	男性	22歳	特別支援学校卒業。中学部から特別支援学校。就労継続支援B型事業所で働く。
Eさん、Eさんの母親	男性	24歳	特別支援学校卒業。中学部から特別支援学校。企業で働く。
Fさん、Fさんの母親	男性	19歳	特別支援学校卒業。小学部から特別支援学校。就労継続支援B型事業所で働く。
Gさん、Gさんの母親、Gさんの姉	男性	25歳	特別支援学校卒業。中学部から特別支援学校。作業所で働く。
Hさん、Hさんの母親	男性	21歳	特別支援学校卒業。小学部から特別支援学校。作業所で働く。
Iさんの母親	女性	21歳	特別支援学校卒業。中学部から特別支援学校。生活介護事業所に通う。
Jさん、Jさんの母親	男性	23歳	特別支援学校卒業。小学部から特別支援学校。作業所で働く。
Kさんの母親	女性	37歳	特別支援学校卒業。中学部から特別支援学校。生活介護事業所に通う。
Lさんの母親	男性	40歳	特別支援学校卒業。中学部から特別支援学校。企業で働く。
Mさん、Mさんの母親	女性	20歳	特別支援学校卒業。小学部から特別支援学校。就労継続支援B型事業所で働く。
Nさん、Nさんの母親	女性	22歳	特別支援学校卒業。生活介護の事業所に通う。
Oさん、Oさんの母親	男性	30歳	特別支援学校卒業。就労継続支援B型事業所で働く。
Pさんの母親	男性	23歳	特別支援学校卒業。中学部から特別支援学校。就労継続支援B型事業所で働く。
Qさん	男性	64歳	地域の中学校を卒業。現在は清掃や草刈りの仕事をしている。
Rさん	女性	34歳	特別支援学校卒業。高等部から特別支援学校。就労継続支援B型事業所で働く。

## 2. 手続き

半構造化面接法による調査を行なった。対象者個別に実施することもあれば、本人とその家族に同時に実施することもあった。

質問内容は、余暇の過ごし方、現在行なっている余暇活動についてのこれまでの経緯、現在の余暇活動に関わる人間関係、現在の余暇活動に対する思い、余暇に関わる通信手段、学校時代を振り返って思うこと、余暇の過ごし方に対する思いなどである。

考察にあたっては、インタビューの録音から筆者が逐語録を作成した。まずは個別のケースにおいて、逐語録を基に、余暇の在り方に関わる要因と考えられる内容や特徴的なエピソードを整理した。次に、全ケースを通してキーワードを抽出し、カテゴリーを作成して、個別のケースの整理から得られた内容を各カテゴリーに分けた。

調査期間は、2019年5月～2019年9月である。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. 余暇活動のきっかけ

#### (1) 家族の関わりがきっかけとなった余暇活動

余暇活動のきっかけとしては、親同士のつながりから余暇活動や活動の場を紹介してもらったという語りが多かった。今回の調査では、「母親同士のつながり」に関する語りが大半であった。

- ・障害者スポーツセンターなど余暇に関する情報は母親同士のつながりから知っていくことが多い。(Jさん)
- ・Kさんが月1回通う歌の集まりは、母親つながりで知った。(Kさん)
- ・Nさんは月に2回、平日に、絵を描く活動ができる場に通っている。小学校時代の友だちが行っており、紹介してもらってNさんも通うようになった。(Nさん)

余暇活動に関する家族の影響についても語られた。特に親からの影響は大きいようである。

- ・Bさんの趣味は寺社仏閣巡りである。祖父の影響で子どものころから一人でお寺や神社をまわっていた。(Bさん)
- ・母親が聴いていた音楽を聴くうちに、Cさんのほうが熱心に聴くようになった。母親とライブに行くこともある。(Cさん)
- ・アクション映画が好きな両親の影響から、Fさんは時々、アクションシーンのような動きをしたりヌンチャクを持ったりして、アクション俳優の真似をすることを楽しんでいる。(Fさん)
- ・Pさんの父親は、あるプロ野球チームのファンである。テレビで応援しており、Pさんも嫌がらずに観ていたそうである。だんだんとルールなども飲み込んできた様子であったことから、「一回行ってみようかって言って行った」ことが、野球観戦に行くようになったきっかけであるという。(Pさん)

また、以下のEさん・Gさんのケースのように、きょうだいが行っていた習い事を一緒に始めるということも少なからずあると考えられる。

- ・Eさんの「有り余る体力」をどうにかしようと、母親は、Eさんの姉も通っていたスイミングスクールにEさんを通わせることにした。Eさんが3～4歳の時だった。Eさんは水泳が好きになっていき、現在まで20年ほど続けている。(Eさん)
- ・Gさんは4年～4年半ほど剣道を習っていた。就職後もしばらく、自分で月謝を払って通っていた。姉が中学から剣道を始めてGさんも道場を見学に行く機会があり、「かつこいい」となったことから習い始めた。(Gさん)

以下の2ケースからは、きょうだいの趣味の影響、きょうだいからの情報で広がる余暇もあるとわかる。

- ・母親はJさんが帰宅後に楽しんでいるゲームについて、「弟がやりだしたころから多分好きなんやと思う」「一緒になって(弟の)真似みたいな感じでやってる」と話す。(Jさん)
- ・弟は、Mさんが観ているYouTubeの検索ボックスにユーチューバーの名前を入れ、動画を観られるようにし

てくれたという。それがきっかけで、Mさんはそのユーチューバーの動画を楽しむようになった。(Mさん)  
以下のAさん・Eさんのケースのように、余暇活動の場を家族が探してきたという語りも複数のケースで聞かれた。

- ・Aさんは合唱団に入っている。新聞広告が出ているのを母親が見つけ、誘ってくれたことがきっかけだった。(Aさん)
- ・母親は、Eさんが一生できるような何かを見つけたいという思いから、何かきっかけがないかと探してきたそうである。「何か趣味になるようなことを」「何か探してあげなあかんと思て」というように語っている。現在Eさんが楽しんでいるラジオについては、面白い芸人がパーソナリティを務める番組にネタを投稿する楽しさもあるといった良さを挙げている。Eさんと一緒に替え歌などを考え、番組に投稿していたこともあるという。(Eさん)

本人が楽しめそうな余暇活動の場を見つけても、条件があり参加が難しい場合もある。Nさんの母親は運営側に対して懸命に頼むことで、Nさんの参加につなげていた。また、親が見学や体験に付き添うこともある。Nさんのケースのように、時間を作って見学をしても「空振り」に終わることもある。こういった側面からも、余暇を広げていく際の家族の負担を指摘できよう。

- ・Nさんが通っているダンスは本来、Nさんが卒業した支援学校のある市の市民か、市に通学・通勤している人しか参加できない。母親が、「中学部のとき3年間通ってたしすごい好きなんです～!とか言って」「めっちゃ去年ゴリ押しして」、Nさんは再びダンスに通えるようになった。余暇の幅を広げるため、先輩の母親とのつながりで知った活動や、相談員に教えてもらったサークルなども積極的に見学している。だが、行ってみると想像していたものと全く違う活動だったということもある。(Nさん)

家族が探していかなくは本人が余暇を楽しむにくいというケースは少なくなかった。Iさん・Eさんのケースからは、子ども時代と比べても余暇活動の場を探すことが難しくなっている状況がうかがえる。

- ・「卒業してからというのはもう情報が入ってこない」。母親は、Eさんの余暇活動の大会で出会う母親たちから情報を聞くようにしている。「なんかないかなあっていうのを常にアンテナはってね、みてる」。「よう役所行ってね、一生懸命そういう生涯学習とかあれ見たりね」「なんかないかなあと思って探したりもしたんですけど」。(Eさん)
- ・「(生活介護は)活動自体もやっぱり単調になる」「学校やったら色んなね、刺激とかたくさんあったけど、それが無い」「余暇の時間を楽しくね、作ってあげなあかんかなとか思ったり」と母親は語る。「小っちゃい時のほうが、もっと色々選択肢はあったかなっていうのはあるんです」。(Iさん)
- ・母親は、とにかく親が余暇を考えて(Nさんが)ひまにならないようにしている現状を語っている。親が頑張らずとも行けて、本人が何をしたいか伝えられるような余暇活動の場がたくさんあれば、という希望がある。グループ活動をやっている施設を探したけれども近所ではなかなか見つからなかったということも話している。(Nさん)

## (2) 余暇活動や日中活動の場から新たな余暇活動につながる

以下のケースで語られているように、余暇活動の場に参加したことがきっかけとなり、他の余暇活動の場につながる場合もある。

- ・Aさんがオープンカレッジに通うことになったのは、Aさんが所属する合唱団のスタッフがオープンカレッジの先生と知り合いで、そのスタッフが誘ってくれたことがきっかけだった。(Aさん)
- ・Hさんは小学生のころから、居住地の市内の養護学校が運営するサークルに、夏休みの間参加していた。そのつながりから、イベントに誘ってもらった。(Hさん)
- ・Qさんはテニスのサークルに入っている。以前一緒に合唱団で活動していた人から「やってみいひんか」と誘われたことがきっかけで、行くようになった。(Qさん)
- ・Rさんは、受講していたオープンカレッジが毎年発行している冊子を見て、大学と地域の女性会が開催する「ダンスパーティー」を知り、毎年参加していた。(Rさん)

就労継続支援 B 型事業所など、日中活動の場から余暇活動の場につながれたというような語りもあった。

- ・ Bさんは24歳（現在は41歳）のときから4年間、オープンカレッジに通っていた。通うことになったきっかけは、作業所の理事長とオープンカレッジの先生が知り合いで、「行って見ないか？」と誘われたことだった。（Bさん）
- ・ 混声合唱を始めたきっかけは仕事仲間が誘ってくれたことだったという。（Qさん）
- ・ オープンカレッジについては、Rさんが働いている職場に「受講生募集」の案内が来ていたことから知ったという。「興味があったし、行ってみたいと思って、参加しました」と話している。（Rさん）

また、Rさんは現在参加している会について、同じ職場の人が参加しているのを知り自分も行ってみたいと思ったということを語っている。

- ・ 「最初〇〇サークルがあって、行ってみたいと思って。それで参加してたんです。それで、もう、参加しなくなっちゃったんです」「もうどうしても参加したいって言って、案内届いたんです、お知らせ」。（Rさん）

余暇活動や日中活動の場から新たな余暇活動につながっている人は、知的障害が相対的に「軽度」である人が多い。人との関わりを通して活動が広がっていくことには、コミュニケーションの力や、新たな場所について自分なりのイメージができること、「参加してみたい」との希望を伝えられることなどが関わっている。そうしたことに困難がある人にとっては余暇が広がりにくい現状があるとも考えられる。

### (3) 移動支援のヘルパーによるきっかけ

対象者には移動支援を利用している人が多かったことから、ヘルパーに関しても様々な語りがあった。以下のケースでは、ヘルパーの誘いや移動支援がきっかけとなって余暇が広がっている。

- ・ Oさんがアイドルグループのファンになったのは、ヘルパーと行った「握手会」がきっかけではないかと母親は推察している。（Oさん）
- ・ 現在Mさんがよく行く場所は、以前のヘルパーに教えてもらった。そういった場所をよく知らなかった母親が「どっかないですか？」と尋ねたところ、ヘルパーが「こういうところがありますよ」と紹介し、Mさんを連れて行ってくれたことがきっかけだった。春は、桜を見に行ったり植物園に行ったりした。ヘルパーが調べてくれた祭りに行き、団子などを食べながら花見を楽しむこともあった。（Mさん）
- ・ Iさんがダンスを始めたきっかけは、担当のヘルパーが他の利用者とダンスの活動に行っており、Iさんの母親に活動の情報をくれたことだった。また、母親は「ヘルパーさんはもう、（知的障害の）手帳で使えるようなコースとか場所とかを、やっぱり考えてくれはる」とも話している。（Iさん）

移動支援を含めた「福祉サービス」の利用については、親同士の情報交換が大きく関わっていることが以下の語りからもうかがえる。

- ・ 移動支援を利用してヘルパーとの外出を始めたのは、小学部の先輩の母親がきっかけだった。Jさんの母親は先輩の母親から話を聞いて移動支援について知り、「そんなんやったら利用しようかなと思って」事業所に連絡したそうである。（Jさん）
- ・ 同じく障害のある子どもを育てている友人に、使っている事業所について聞き、その友人が良いと言った事業所に「その人づてにみたいな感じで」頼むことにしたそうである。「そのほうが確実かな」との思いもあった。（Iさん）
- ・ 相談員を介して事業所への連絡をするようになったのは学校時代からだという。先輩の母親から「全て親がやっていたらしんどくなること」「今後、親が高齢になると余計にしんどくなること」も聞いていたと語る。（Nさん）

このことは、何らかの事情によって親同士のつながりがもちにくい家庭には、移動支援などの「福祉サービス」に関する情報が十分に届きにくい場合があることも示唆している。必要であればそういった支援につながるきっかけをつくっていくことも、学校ができることではないだろうか。

#### (4) 学校・教員からの影響

学校や教員の取り組みが本人の余暇に影響を与えているケースも複数見られた。以下のケースでは、教員の働きかけや教員と一緒に楽しんでいた活動が本人の現在の余暇につながっている。

- ・教室にギターが置いてあり、最初は先生が弾いているのを見ていたが、「やってみるか？」と誘われ、コードなどを教えてもらって弾けるようになった。(Cさん)
- ・Eさんが6年生の時、担任の先生が課外授業として新幹線に乗せてくれた。見学のはずだったが、サプライズで実際に動いている新幹線に乗れることになり、Eさんは大感激で「涙が出るほど」喜んだ。もともと新幹線が好きだったが、その経験をきっかけとして新幹線が大好きになった。(Eさん)

また、学校での取り組みによって楽しさを知ったことが、現在の余暇活動につながっているとみられる語りもあった。

- ・オープンカレッジでは、演劇療法のクラスを4年間選択した(このオープンカレッジは2時限続きであり、2コマ目の授業は音楽と演劇の2種類から選べる)。高等部の時、学芸会でクラスメイトと芝居をしたことが楽しく、オープンカレッジでも演劇を選んだという。(Bさん)
- ・マラソンが好きになったきっかけについて、母親は、学校で走る練習がよくあったからではないかと考えている。運動会や、冬季に行なわれた持久走の取り組みなどが、きっかけになったようである。(Eさん)
- ・Iさんは「ヘルパーさんとおやつ交換がしたい」と言うことがある。その際はヘルパーに何かおやつを持ってきてもらい、Iさんの持って行ったおやつと交換している。「交換して食べるっていうのが、楽しいみたい」と母親は語る。Iさんは、学校の遠足で恒例だった「おやつ交換」で、人とおやつを交換することに「はまった」ようである。(Iさん)

今回の調査では、同じ特別支援学校を卒業した人が多かったため、同じ取り組みについての語りも聞かれた。この学校では、ほとんどの生徒が中学部から自分で公共交通機関を乗り継いで通学するという取り組みが行なわれている。調査において、自分で公共交通機関を利用できることは、余暇にも関わっていることがうかがわれた。

- ・Dさんは中学部から支援学校に通った。母親は、「学校で色々な経験をさせてもらえたことに感謝している」と話す。いくつか語られたなかで、最初に挙げられたのが「電車に乗って一人で移動できるようにしてくれたこと」だった。「そのおかげで今は〇〇駅まで一人で行くこともできる」、「それがすごく助かっている」と母親は語っている。(Dさん)
- ・母親は、「(Iさんが)普通の学校行ったら、まず、自分でバス乗ってどっか行ってくことはできなかったと思う」と話す。(Iさん)
- ・Oさんが通った特別支援学校では、遠足などの際、色々な駅が集合場所になっており、Oさんの自宅からそこまで行くには電車に乗る必要があった。「こっそり付いて行ったりとか」「学校の先生が向こうで待っていてくれるから、連携とりながら練習したりとかしてましたね」と母親は振り返る。(Oさん)

学校での取り組みに関わっては仲間の存在も大きい。仲間の楽しそうな様子から苦手だったことにも挑戦していた、仲間との関わりの中で色々なことに興味をもった、というような語りがあった。

- ・Dさんの通った特別支援学校では「行事とか楽しいことをいっぱいさせてもらう」そうで、Dさんはだんだんと「楽しそう」「自分もやりたい」となっていったようである。苦手だったことも、「みんなやってるし自分も一緒にしたい」「やってみたら意外と大丈夫やった」というように変化していった。(Dさん)
- ・Gさんの姉は、Gさんが小学生の頃、クラスの子にサッカーを教えてもらったり、当時流行っていたカードゲームのカードをクラスメイトにもらったりしていたことを振り返り、「そういう一緒に空間にいないと、あげるあげないとか、一緒に遊ぶ遊ばないとかできないと思う」と話す。小学校時代の友だちとの関わりの中で、Gさんは色々なことに興味を持ったそうである。(Gさん)

多くはなかったものの、学校や教員からの情報が卒業後の余暇活動につながっているケースもあった。

- ・Nさんは、中学部の3年間、ダンスに通っていた。学校からのお便りがきっかけである。(Nさん)
- ・Hさんには元々「大学に行きたい」という強い思いがあった。そんなHさんの様子を見て、高等部の先生がオープンカレッジを探してくれたそうである。Hさんはそのオープンカレッジに通って今年で3年目になる。

(Hさん)

以下のJさん・Lさんのケースにもあるように、余暇や学校卒業後の生活に関して、学校からは特に情報がなかったという語りもあった。

- ・現在は、余暇について「どうしても親頼みになって」いる状態だという。「これから先、親も年とっていく」という思いから、現状に対する懸念はあるものの、どうしていったらよいのかといった迷いもあることが語りからうかがわれた。学校卒業後の生活などに関しても、親が自分で調べていくことが多いようである。Jさんの母親は、「学校からは特に何も無い」とも語っている。(Jさん)
- ・母親は、余暇に関して学校からの情報がなかったことについて、「そらそうですね」と話している。Lさんの母親にとって、学校から余暇に関する情報がないことは「当たり前」のことであり、余暇は家庭で何とかしていくものとの意識があることがうかがわれた。(Lさん)

どこまでを学校がすべきこととするかは議論の余地があると考えられるが、学校時代における情報提供を充実させることや、学校卒業後も必要であれば情報を得られる機関につなげられるようにしていくといったことは、教育と福祉の連携といった側面からも求められることであろう。

## 2. 学校にできること

### (1) 友だち同士で出かけるための支援

余暇に関わって、公共交通機関や公共施設等の利用、地域行事への参加、買い物の仕方などは、これまでも学校教育のなかでそれなりに取り組まれてきている。しかし、学習指導要領にも記載されている「友達と共に楽しむこと」に関しては、友人と外出することに関わる困難への働きかけができないまま学校を卒業しているとみられるケースも、今回の調査では見受けられた。

学校時代にあると良かった支援について、Dさんの母親は次のように語っている。

- ・「友だち同士で出かけるような支援があるといいな。出かける計画立てて、先生が後ろからそっと付いて行ってくれて、みたい。でも先生方もお忙しいでしょうからそこまでは」。(Dさん)

以下のケースのように、友人との待ち合わせや意思疎通に関する事など、交際をめぐる課題については、複数の母親が語っている。

- ・Eさんは職場の先輩と、休日に会う約束をしたことがある。「朝9時に(Eさんの最寄りから3駅ほど先の駅の)〇〇口に待ち合わせやねん」と言って出かけたが、しばらく経って「まだ来はらへん」と母親に電話をかけてきたそうである。その時点で待ち合わせ時間からは、かなり時間が経っていたため、母親が「もう連絡したら？」と促し、Eさんは先輩に連絡した。「ちょっと遅れる、とか言わはった」とのことであったが、更に1時間後、「やっぱり今日(先輩は)行けへんやわ」と母親に連絡が入ったという。Eさんは昼頃に帰宅した。結局3時間ほど先輩を待っていたことになる。(Eさん)
- ・Hさんの母親は、「なんか、会社の人と待ち合わせした！とかって言うんですよ。何時に待ち合わせしたん？(と聞くと)『わからない、教えてください』って」といったエピソードを語っている。(Hさん)
- ・Iさんは学校に通っていたころ、友だち同士で遊びに行っている友だちがとても羨ましかったようである。学校で、一緒に遊びに行った子たちの話を聞き、「それにすごい憧れて」、自分も友達と遊びに行きたいという気持ちを母親に話していたという。しかし、「その先に二人になったときに発展しないというか」「もっと意思疎通ができて、いろいろ話ができるんやったらお互い楽しいやろうけど、そのへんが難しい」といった状況、「かたちだけは一緒に遊びに行きましたっていうことはできるけど、結局なんかもめてね、パニックになるとか」「相手のお友だちが、もう行きたくない、みたいになってしまったりとか」といった懸念も母親は語っている。「本人はほんまにそういうの行きたい行きたい、お友だちと何々したい、っていうことはすごい言ってる。高等部の時とかは」「で、いつも私がおまかしてた」。(Iさん)

本人の経験が十分でないことから生じていると考えられる課題もあれば、本人の性質や障害の特性に関わるとみられる事柄もあり、「友だち同士で出かけるような支援」には、多様な働きかけが必要となることが予想される。

また、「先生方もお忙しいでしょうからそこまでは」(Dさんの母親)というような語りがあるように、複数の母

親の語りから、「余暇に関することは家庭がやること」といった認識も根強いことがうかがわれた。余暇に関わることを学校教育のなかに取り入れることは要望しにくい現状があるのかもしれない。

### (2) 本人の楽しみをつくっていく

○さんの母親は、学校時代を振り返り、余暇活動は現在ほどでなかったものの、学校行事などを本人は楽しんでいたようであることを語っている。

- ・「学校は学校でやっぱりほら、色んな取り組みしてくれてはったし、まあなんか一つの行事に向けて、それはそれで楽しんでではったと思います」との語りから、生活全体で見れば学校時代も○さんにとって楽しみの多いものだったことがうかがわれた。(○さん)

○さんのケースでは、ある会に入会したことで卒業後も余暇が広がっている。だが、そういったつながりがない人の場合、卒業後に、学校行事などがなくなることで楽しみが減ってしまうこともあると考えられる。先述のように、学校や教員の取り組みが卒業後の余暇活動につながっているケースもあった。こういったことを意識しながら、本人の楽しみをつくっていくことも学校教育において求められているといえよう。

余暇の広がりには、本人が「願い」をもつことも関わっている。それまでの楽しい経験によって生まれる願いもある。Rさんは、オープンカレッジや現在参加している会での経験から、「色々な大学にオープンカレッジがあったら」という願いをもち、その具体的なイメージを思い描いている。

- ・「これからしてみたいこと」を尋ねたところ、色々な大学にオープンカレッジがあったら、という願いが聞かれた。「おしゃべりをできるような場所と、遊ぶような場所」「ダンスしたりとか」「ゲームとか」といった具体的なイメージも語られた。Rさんは、参加している会の活動でペットボトルのボウリングやジェンガなどのゲームをしたことが楽しかったそうである。(Rさん)

### (3) 本人の居場所をつくる

親が高齢期を迎えるなどして家族に頼ることが難しくなる時期において、余暇活動の場が本人にとって心の拠り所になる場合もある。以下のAさん・Bさんは共に40代であり、Aさんはグループホームで一人暮らしをしている。2人にとって、「思いを受け止めてもらえる場」のもつ意味は大きいことがうかがわれた。このことから学校としては、本人にとっての居場所を日中活動の場だけではなく複数つくることを目指す、卒業生が居場所をもつことができているかどうかを把握するといったことも大切ではないかと考える。

- ・余暇活動として通っている地域活動支援センターの所長と交換ノートを活用して悩みを打ち明けたり、月に一度の面談で不安に思っていることなどを聞いてもらったりしている。(Aさん)
- ・会に行くと、「一週間どうされてましたか」「元気ですか」「何か困ってることありませんか」といったことを聞いてもらえるそうである。Bさんは何でも相談できるのが嬉しいと感じている。話を聞いてもらえることなどが心の支えとなっているようである。(Bさん)

学校などでは、卒業生対象のサークルや同窓会といったつながりが続くこともある。Hさんの母親が語っているような「いつでもいてくれる安心感」は、その場所に行くことがあまりなくなっても、本人にとって支えとなるものであるのかもしれない。

- ・「(母校は)いつでもいてくれるっていうか、安心してらからっちゃうのもあるんでしょうけど」。(Hさん)

Jさんのように、学校の卒業生対象の余暇サークルに参加しているという語りも複数聞かれた。

- ・Jさんの卒業した特別支援学校では月に1回、卒業生向けの余暇サークルの取り組みがある。その一つにサッカーがあり、Jさんも参加している。(Jさん)

本人の居場所の一つとなっているという面でも、学校の余暇サークルの意義がうかがえる。先のAさん・Bさんのケースにみられるような「思いを受け止めてもらえる場」の役割を学校が果たしている場合もあろう。しかし、学校教育の枠組みの外にある取り組みであるがゆえに、担い手に関わる課題もあると考えられる。学校卒業後のつながりのかたちについては、つながりの意義や体制面等での課題をふまえた議論を更に深めていく必要があるのではないだろうか。



#### (4) 情報の提供

卒業後における余暇活動の場の少なさも語られている。Hさんの母親は、障害者スポーツセンターについて、「理解してもらえらる」良さがあると話す。そういった場が他になかなかないこともうかがわれた。Jさん・Iさんのケースで語られた「サークルみたいな人があれば」「障害があっても行けるカルチャーセンターみたいな、そんなんとかあればいいのにな」との願いにもそのことが表れている。

- ・「(障害者) スポーツセンターっていうのは、ありがたいですね。障害者の人が行ってるから、みなさん理解してもらえますし、着替えるとかそういうのも」「助かってますね、なんかそういう、施設とかがあると助かりますね」。(Hさん)
- ・母親は、「休みの日も、なんとなく予定わりと詰まっていく」としながらも、ヘルパーとの外出や友だちとの卓球などの予定がある日以外は「親としかやっぱり出かけられない」と話し、「サークルみたいな人があれば」との思いを語る。「いつまでも親も若くない」という思いも、「親を頼らずになにかできるようなことがあれば」との願いにつながっている。(Jさん)
- ・「障害があっても行ける、カルチャーセンターみたいな、そんなんとかあればいいのにな」「ちょっと生け花したいなあとか思っても、そんなちゃんと教えてくれるような先生がいるようなことか」「普通の人ができるようなこと？ね、ダンスを習いたいと思ったらダンスを教えてくださいとか」。(Iさん)

学校卒業後は運動量が減ってしまうということに関わって、運動ができる場の情報を求める語りもあった。

- ・母親は、学校を卒業すると太りやすいことや動かないことをあげ、体を動かせる場所などの情報が全くないとして、そういった情報があればとの思いを語っている。障害者スポーツセンター以外では、なかなかないという。(Fさん)
- ・Jさんは学校時代、駅から学校まで歩いており、かなりの運動量だった。現在は仕事場の送迎があり、自宅から歩いて5分ほどのところにバスが来るため、運動量が減ったそうである。「あんまり太ったらあかん」ということで、夕食の主食を一膳にするなどダイエットを意識している。(Jさん)
- ・母親は、「学校行ってる時から、なんかそういう、障害者のスポーツみたいなのがあるのを教えてもらって、情報あったらよかったなあと思ってます」と語る。そういった場所に通って活動を楽しんでいれば「卒業してそのまま(運動を)せえへんって言わんですんだかもしれへん」と感じている。「今になってスポーツってせえへんでしょう？大人になったらね」。(Lさん)

学校時代に、体を動かす楽しさを経験できるようにするとともに、学校卒業後も運動習慣が続くことを意識した取り組みや情報提供も大切と考えられる。

また、学齢期から継続して参加できる場があまりないということも語られた。現在、障害のある子どもの余暇には、放課後等デイサービスが大きく関わっている。しかし、学校卒業後には同じようなものがなく、支援が途切れてしまうという課題がある。

- ・放課後等デイサービスを利用した子が成人になっていっていること、卒業で(支援が)急に途切れるので困っている方もいることも母親は語っている。(Dさん)
- ・Nさんの母親は、放課後等デイサービスが広がったことで、学校卒業後にそれまでとのギャップを感じる親がいるのではないかと推測している。母親は、学校時代の余暇支援サークルについて、「若い色んな考えで、色んな人連れて行ってもらったり、色んな活動してもらって、っていうのがすごいありがたかった」として、卒業後の人たちのためのそういった場もあればという願いをもっている。(Nさん)

余暇活動の場の少なさや見つけにくさは、福祉就労をしている人や生活介護事業所に通う人の帰宅時間の早さから考えても、改善されるべき課題である。今回のインタビュー調査においても、早い人では15時頃に日中活動が終わっており、16時半には帰宅しているケースがほとんどだった。このことから、帰宅後の過ごし方や余暇に関わる視点は、学校教育において重要と考えられる。

- ・Fさんは現在、基本的には月曜日から金曜日まで、10時から15時の時間帯に仕事をしている。朝の迎えが9時20分、帰りが15時20分だという。母親は、仕事の時間が短いと感じている。本人の希望で週3回、仕事

の後にヘルパーと外出している。(Fさん)

- ・ Nさんは平日、16時20分には帰宅することから、「そっからの余暇活動っていうのも、何かあればなっていうのは」といった思いも母親は語っている。先輩の母親のなかには、居宅支援を利用している人もいるそうである。(Nさん)
- ・ Iさんは高等部を卒業して3年目になる。母親は、卒業してからこれまでの様子をふまえて、「3時半に帰ってきてから、ごはんの時間までの間の使い方がやっぱりね、もうちょっとやっぱり考えなあかんかな」と話す。卒業してからは、「もう、たっぷり時間がある」ため、Iさんはかなり動画を観ているという。「みんなどんなふうに過ごしてはるんか、私逆に聞きたいなあと思って」との言葉からは、現状に課題を感じつつも、どのように改善していけばよいかわからないという状況もうかがわれた。(Iさん)

社会の状況や制度の問題が絡んでいることでもあり、余暇の過ごし方や余暇活動の場についてできる限りの情報提供をするといったこと以外で、現時点において学校にできることは少ないかもしれない。だが、卒業生が日々どのように過ごしているか、そこにどのような課題があるかといったことを認識し、学校にできることを探っていくことは必要といえよう。

#### IV. まとめ

余暇に関わって家族が担っている部分は大きく、家族によって余暇が広がることも少なくなかった。このことは、家庭環境や家族の状況によって本人の余暇が制約を受ける場合があることを示唆している。現状において、情報の収集、「福祉サービス」の利用にあたっての連絡調整、本人と周囲の人との間に入って調節すること、本人への直接的なサポートなど、多岐にわたる内容が事実上、家族の役割となっている。状況によっては家族の負担が大きくなりやすいという問題も指摘できよう。また、今回のインタビュー調査では、これらの役割が主として母親によって担われていることがうかがわれた。

本人への包括的な関わりができ、福祉との連携もとれることから、学校には卒業後の余暇に向けた準備や、本人・家族への情報提供などが求められる。今回のインタビュー調査においても、学校での経験から卒業後も楽しめるものができたり、教員からの情報提供により余暇活動の場につながれたりしたケースがあった。しかし、余暇に関する学校からの意識的な働きかけはあまりないことも調査からわかった。在校生や卒業生にどのようなニーズがあるのかを把握し、できることから取り組んでいきながら、よりよい情報提供等ができる体制を整えていくことが必要と考えられる。

また、余暇を楽しむことに関わる力は、余暇のみならず生活全体において重要なものも少なくない。そういった力の育ちを支えるために、必要な経験ができるよう工夫する、本人が楽しめることを一緒に探す、といった取り組みをしていくことも大切であろう。併せて、余暇に関わる取り組みをしていくとき、教員や周囲の大人が考える「良い余暇」の押し付けにならないよう留意する必要がある。どのような余暇活動があるのか、自分にはどのような過ごし方が合っているのかを知ることができるようにすると同時に、自分の性質やその時の気持ちなどに合わせて余暇の過ごし方を選択する力を育てることも意識したい。

今回の調査では、インタビューをしなれば知りえなかったような状況や思いもあった。学校教育段階での指導・支援を考える際にも、まずは本人や家族の思いや願い、現状などを丁寧に知っていくことが重要といえる。その上で、卒業後の生活全体を見据えつつ、今できることは何か、何を大切にしていけばかを検討していくことによって、一人一人の余暇のゆたかさにつながる具体的な取り組みに近づいていけるのではないかと考える。

最後に、本研究の限界と今後の課題について述べる。まず、データの偏りについて二点ある。一点目は、同じ特別支援学校を卒業した対象者が多かったことである。二点目は、本人の年齢や居住形態についてである。対象者は20代が多い。居住形態については、親との同居が大半を占めていた。居住形態による余暇の違い、親のサポートが得られなくなった後の余暇の状況や思いなどを調査していくことも必要である。また、今後は、放課後等デイサービスで余暇を過ごすことの多かった世代が学校を卒業していく。今回の調査対象者とは異なる思いやニーズがあることが予想される。その世代への調査も求められる。さらに、教員や福祉関係の支援者の視点もふまえ、現状にお

いて可能な支援・援助や、学校と福祉機関との連携などについても検討していくべきであろう。

## 参考文献

- J. デュマズディエ（1972）『余暇文明へ向かって』中島巖訳，東京創元社
- 郷間英世・藤川聡・所久雄（2007）「知的障害者の余暇活動についての調査研究—通所授産施設に就労している人を中心に」『奈良教育大学紀要（人文・社会）』第56巻第1号，67-70
- 今井優香（2011）「軽度知的障害者へのグループホームにおける余暇支援の在り方」『滋賀大学大学院教育学研究科論文集』第14号，49-57
- 栗林睦美・野崎美保・和田充紀（2018）「特別支援学校卒業後における知的障害者の就労・生活・余暇に関する現状と課題—保護者を対象とした質問紙調査から」『富山大学人間発達科学部紀要』第12巻第2号，135-149
- 文部科学省（2018）『特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（小学部・中学部）』開隆堂
- 武蔵博文・水内豊和（2009）「知的障害者の地域参加と余暇活用に関する調査研究」『人間発達科学部紀要』第3巻第2号，55-61
- 佐々木健太郎・野口和人・村上由則（2016）「知的障害児の就労後も活用しうる人間関係の構築・拡大を基盤とした移行支援の実践的研究—仲間関係の拡大が顕著に見られたある事例の長期的な分析から」『宮城教育大学特別支援教育総合研究センター研究紀要』第11号，47-57
- 鈴木洗平・細谷一博（2017）「成人知的障害者を対象とした休日のスポーツ活動における環境実態調査」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』第67巻第2号，85-91